

研究論文

大学図書館で実施する学習支援の成果と課題 —Study Support Space の実践から—

吉田 博¹⁾ 佐々木奈三江²⁾ 亀岡由佳²⁾ 枝川恵理³⁾ 斉藤くるみ⁴⁾
¹⁾ 徳島大学教育改革推進センター ²⁾ 徳島大学附属図書館
³⁾ 徳島大学総合科学部 ⁴⁾ 徳島大学工学部

要約：我が国の大学教育において、学生の主体的な学習を促進することが求められる中で、大学図書館は、学習支援に貢献できる可能性を高めている。このような背景のもと、全国の大学図書館ではラーニング・コモンズの整備や学習支援サービスの実施が始まっている。徳島大学においてもラーニング・コモンズの整備に続き、学生の学習相談に対応する Study Support Space (SSS) の取り組みが始まった。SSS は自主的なピア・サポート活動として実施しており、成果を出し、継続的に活動するためには、現状の成果や課題を検証することが必要であると指摘されている。本研究は、学習相談に対応するアドバイザー、徳島大学の学生に対するアンケート調査をもとに、SSS の成果と課題を明らかにすることで、今後の学習支援の充実につなげる示唆を与える。

(キーワード：学習支援, 学習相談, 効果検証, Study Support Space, ピア・サポート)

Achievements and Problems of Learning Support Held at University Library - From the Practice of Study Support Space -

Hiroshi YOSHIDA¹⁾, Namie SASAKI²⁾, Yuka KAMEOKA²⁾, Eri EDAGAWA³⁾ and Kurumi SAITO⁴⁾

¹⁾ Center for the Enhancement of Teaching & Learning, The University of Tokushima

²⁾ University Library, The University of Tokushima

³⁾ Faculty of Integrated Arts and Sciences, The University of Tokushima

⁴⁾ Faculty of Engineering, The University of Tokushima

Abstract: Universities are now required to encourage university students to take the initiative in studying. This phenomenon enhances the potential of university libraries to support student learning. Thus, university libraries in Japan are establishing learning commons or implementing learning support services. The University of Tokushima, as well, has established a learning commons, and implemented a learning support service called "Study Support Space (SSS)" for advising. SSS is a voluntary peer support activity, and its continuation depends on a verification of its present achievements and problems. Thus, results of a questionnaire completed by students and advisors are discussed. The discussion is centered on the outcomes and future challenges of SSS in aim of bettering learning support in the future.

(Keywords: learning support, learning consultation, examination of the effects, Study Support Space, peer support)

1. はじめに

我が国の大学教育においては、学士課程教育の質的転換が強く求められており、2012年8月に出された中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて¹⁾」の中では、特に、学生の主体的な学修を促進することが叫ばれている。その具体的な取り組みの一つとして、学習環境の整備が行われている。これらの背景のもと、学習支援に大学図書館が貢献できる可能性が高まってきている²⁾。その代表的な取り組みとして、学生の学習を支援するためのラーニング・コモンズを大学図書館に整備することが挙げられる。

ラーニング・コモンズとは、文部科学省(2010)によると「複数の学生が集まって、電子情報も印刷物も含めた様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする「場」を提供するもの³⁾」とされている。また、米澤(2008)は、我が国におけるラーニング・コモンズは、学生が自主的に問題解決を行い、自分の知見を加えて発信するという学習活動を支援するための施設とサービス・資料を提供する必要から設置したものとしてまとめている⁴⁾。その中でラーニング・コモンズは、施設・設備と資料に加え、サービスも重要な構成要素であると指摘している。

ラーニング・コモンズにおけるサービスの事例としては、数多く報告されており枚挙にいとまがない。特に、人的なサービスとして、決められた時間に教員、または大学院生を常駐させ、学習に関する相談に対応する取り組みが近年増加している傾向にある⁵⁾。例えば、愛媛大学のSHD(Study Help Desk)では、大学院生が大学図書館に待機し、学習相談に対応している⁶⁾。学習相談を大学図書館で実施する意義としては、ラーニング・コモンズにおけるサービスに加え、次のことが考えられる。大学図書館は、大学施設の中でも、学生にとって学習の場として認知されており、多くの学生が学習に関連した目的で利用している。また、大学図書館には学習支援に必要な文献や授業で使用している教科書、情報ネットワークの環境が整っているという特徴がある。

徳島大学においても「自由にディスカッションをしたり、コミュニケーションを図ったりしながら自主的・創造的に学習に取り組める場所」として、附属図書館本館 1 階にラーニング・コモンズを整備した。また、2013 年 4 月からは、附属図書館本館 1 階のピア・サポートルームにおいて、教員・大学院生が学生の学習相談に対応する取り組み Study Support Space (以下 SSS) を開始した。

SSS の詳細は後述するが、2013 年 12 月現在では、有志の学生と図書館職員によるピア・サポート活動として実施し、相談に対応するアドバイザー(教職員・大学院生)のボランティアとしての協力によって成り立っている。このような自主的なピア・サポート活動においては、教育的効果が見られる取り組みも報告されているものの、活動の効果や課題の検討を行うことは、必要かつ重要であると指摘されている⁷⁾。さらに、SSS の徳島大学における意義や今後の課題を明確にし、質の向上を図ることが、実施体制や位置づけの強化につながると考える。

そこで、本研究は大学図書館で実施する学習支援の取り組みとして、2013 年 4 月から 12 月までの SSS 利用状況や相談内容等の実績をまとめるとともに、次の調査を実施し、成果と課題を明らかにするものである。調査は、相談に対応するアドバイザーを対象とした SSS の意義や改善点に

関するアンケート、学生(主に 1,2 年生)を対象とした SSS 利用に関するアンケートである。

2. Study Support Space

SSS は、学生の学習に関する相談に対し、アドバイザー(教職員、大学院生)が対応する取り組みである。アドバイザーは、徳島大学附属図書館本館 1 階のピア・サポートルームにて、SSS 時間割(図 1)に応じて待機し、相談に訪れた学生の相談に対応する。SSS は、学習相談を通して学生の学習に対する取り組み方を改善することを目的としており、自主的なピア・サポートとして活動する有志の学生と図書館職員、教員で構成された、SSS 企画チームが運営を行っている。SSS 企画チームのメンバーは、アドバイザーへの協力依頼、時間割の調整、相談内容の記録・分析、SSS の広報活動などを行っており、2013 年 12 月 20 日現在で、学生 3 名、図書館職員 2 名、教員 1 名が所属している。SSS 企画チームの活動理念は、「大学生の日々の学習における躓きに対して、学習支援を行うとともに、学習をするために必要な基本知識・技能を習得する場や機会を創ることで、大学生の学習スタイルの向上、改善を行う。」ことである。アドバイザーは、2013 年 12 月 20 日現在で、教員 12 名、職員 1 名、大学院生 2 名であり、相談者の学部・学科・学年・対応した相談内容等を相談記録シート(図 2)に記載する。相談記録シートの内容は、SSS 企画チームの学生がデータ化して管理している。

3. Study Support Space の実績

SSS は 2013 年 4 月以降、授業期間中の平日は毎日実施し、2013 年 4 月の開始から 12 月末までの間で 131 日実施し、累計相談者数は 314 名であった。

学年別相談者数の割合を図 3、学部別相談者数の割合を図 4 に表している。また、表 1 には詳細な相談者の内訳を表している。図 3 より、1 年生が全体の 6 割を占めており、学年が上がるにつれて、利用者が少なくなっていることがわかる。図 4 より、工学部と総合科学部の学生が利用者の約 7 割を占めており、表 1 からは、医歯薬学部の利

SSS 学習支援内容・アドバイザー (12・1・2月)

2013 年 11 月 27 日現在

時間帯	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday
14:30 ↓ 15:30	数学 大沼 正樹 先生	線形代数・勉強の仕方 吉田 博 先生	情報リテラシーレポートの書き方 金西 計英 先生	物理学・レポートの書き方 斉藤 隆仁 先生	
16:00 ↓ 17:00	レポートの書き方 出口 桜子 さん	英語 宮田 政徳 先生	数学 大淵 朗 先生		心理学・レポートの書き方 野間 あずさ さん
17:00 ↓ 18:00	物理学・レポートの書き方 古屋 玲 先生	物理学・他 小山 晋之 先生	文献の探し方 佐々木奈三江 さん	英語・留学相談 福田 STEVE 先生	化学 森賀 俊広 先生
18:00 ↓ 19:00	線形代数・勉強の仕方 吉田 博 先生		物理学 日置 善郎 先生	基礎生物学・レポート相談 佐藤 高則 先生	線形代数・勉強の仕方 吉田 博 先生

★上記の時間割とは一部異なる場合があります。SSS を利用する場合は、以下のいずれかの方法で最新の情報をご確認ください。

①ピア・サポートルーム前の時間割掲示板、②徳島大学附属図書館ホームページ

図 1 SSS 時間割 2013 年 12・1・2 月版

SSS アドバイザー相談記録シート

日時: (月 日) : (時) ~ (時)

アドバイザー: ()

◎相談者リスト (グループ単位で記入)

No	学部・学科・学年	内容
1	相談者数 名	
2	相談者数 名	
3	相談者数 名	
4	相談者数 名	
5	相談者数 名	

◎SSS 運営チームへのメッセージ

より さんへメッセージ

図 2 相談者管理シート

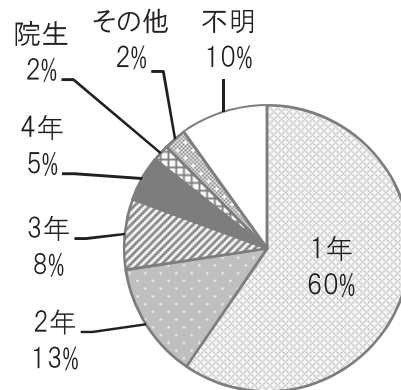


図 3 学年別相談者数の割合 (%)

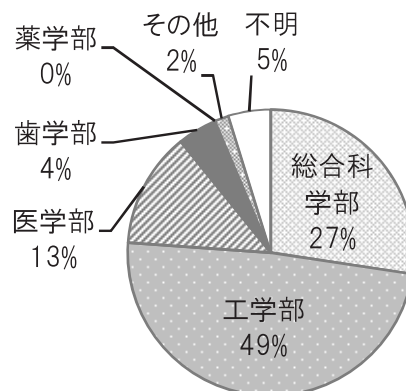


図 4 学部別相談者数の割合 (%)

表 1 SSS 利用者の内訳 (人)

	総合科学部	工学部	医学部	歯学部	薬学部	その他	不明	合計
1 年	44	93	40	10	0	0	0	187
2 年	22	17	0	0	0	0	2	41
3 年	10	15	0	0	0	0	0	25
4 年	6	9	1	0	0	0	0	16
院生	0	6	0	0	0	0	0	6
その他	1	0	0	1	0	5	1	8
不明	3	13	0	3	0	0	12	31
合計	86	153	41	14	0	5	15	314

用者はほとんどが 1 年生であることがわかる。このことから、SSS は主に初年次学生に利用されており、SSS が設置してある常三島キャンパスで授業が実施されている学部・学年に利用が偏っていることが判明した。

続いて相談の内容について、①授業や学習に関する学習相談、②進路や課外活動等の学習内容以外の相談、③雑談、の 3 種類に分けに分け、その割合を図 5 に表した。それぞれの相談件数は、① 200 件、② 69 件、③ 39 件であった。また、①学習相談のうち、科目の内訳を図 6、②学習内容以外の相談のうち、その内容の内訳を図 7 に表している。これらの結果より、学習に関する相談が約 6 割程度であるが、進路や課外活動、大学生活に関する相談も 2 割程度あり、初年次学生の大学生活や将来の進路に関する不安を解消するために、SSS は貢献していることも推察できる。学習に関する相談の内容は、数学や物理学に関する相談が約 7 割を占めている。これは、設定した時間割に数学や物理学の時間帯が多いことも関係していると思われるが、化学の 6% も含めると、理系に関する相談が多くの割合を占めている。徳島大学は理系学部が多いことから、初年次学生にとって、専門教育科目の基礎にあたる内容を相談する場として、活かされていることがわかる。また、レポートの書き方に関する相談が 14% であることから、高校までの学習では書くことがなかったレポートについて、書き方や書くための準備の仕方などを学ぶことができる場所としても寄与していることがわかる。

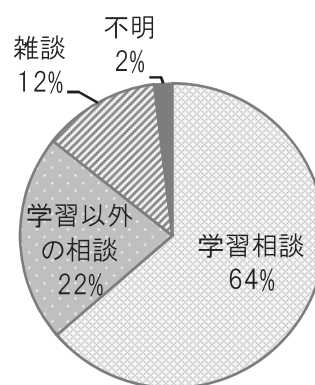


図 5 相談内容の種類別の割合 (%)

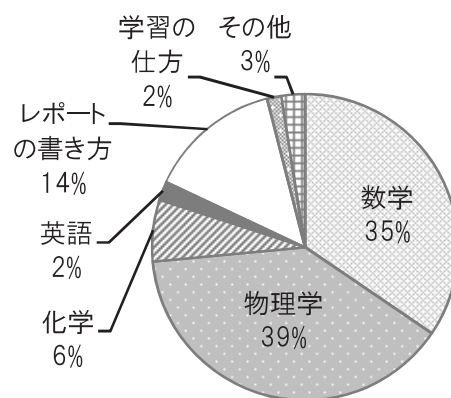


図 6 学習相談のうち内容別の割合 (%)

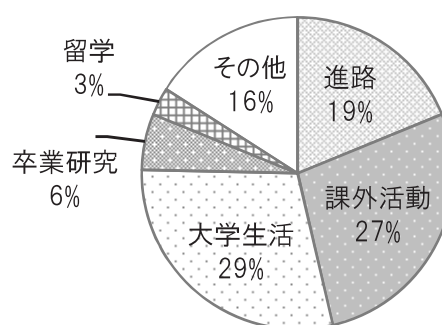


図 7 学習以外の相談のうち内容別の割合 (%)

4. アドバイザー対象の調査による成果と課題

前期の SSS を担当したアドバイザーを対象に、前期の SSS 終了直後 (2013 年 8 月上旬) に、SSS の意義や改善点等に関するアンケートを実施し、13 名 (教員 11 名、大学院生 2 名) から回答を得た。すべて記述式で、設問及び回答は表 2~4 の通りであった。なお、各表における回答番号 1.~11. は教員、12.13. は大学院生のアドバイザーによる回答である。

まず「SSS は学生にとってどのような意義があると思いますか?」という設問について表 2 を分析する。10.12.13. のアドバイザーの記述から、学生が気軽に学習に関する質問ができる場としての意義が伺える。2.3.8.11. の記述からは、アドバイザーとの距離が近いために、深い理解や、学習への興味につながるケースがあることがわかる。一方で、5.6. の記述からは、相談者が少ないために、現状では意義がはっきりしていないという意見も挙げられた。以上の意見から、SSS は気軽に学習相談ができることや、アドバイザーとの関係

構築、疑問点の解決、内容を深く理解することができる場としての意義が見えてくる。

続いて「SSS はアドバイザーにとってどのような意義があると思いますか?」という設問について表 3 を分析した。1.3.4.5.6.9.10. のアドバイザーの記述から、学生が何に躓いているのか、何を思いながら徳島大学での学生生活を送っているのか、などの学生の様子がわかるという意義が挙げられた。5.11. の記述からは、授業改善につながるという意義も伺える。2. の記述からは、他の教員の授業の様子がわかるという回答が得られた。また、12.13. の記述からは、大学院生にとっては、学習相談に対応することで、学習に対する意識の向上につながっていることが推察される。以上の意見から、SSS はアドバイザーにとっても、教育活動において有益となる新しい気づきや発見が得られていることがわかる。

次に「SSS の改善すべき点があればお書きください。」という設問について表 4 を分析した。1.6. の記述からは、SSS の設備や環境に関する改善点

表 2 SSS アドバイザーアンケートの設問と結果 1 (N=13)

設問 1 : SSS は学生にとってどのような意義があると思いますか?	
1.	役に立っていると思います。
2.	教員の立場からは、することを諦めてしまいそうな事も、学生だからこそ自分を含め皆のために目標達成のために努力し続ける所。
3.	わからないところをただ聞くだけでなく、SSS を利用することでアドバイザーとの関係が築け、学生生活や進路に関する相談、学問に対する興味にまで発展していく可能性がある。
4.	1 人では解決できない疑問点について、いつまでも悩む必要がない。
5.	一部の利用者しか使っていないのでなんとも言えません。教員との会話が比較的によりやすい場となっていると思います。
6.	今の利用具合では、存在しないよりましかなという程度でしょう。
7.	(無回答)
8.	自分で勉強したり、与えられた課題等に対して考えた答えも、これで正しいのか自信を持ってない学生がいます。そういった自学自習の学生のために正しい知識の根拠を作れると思います。
9.	すごく役立っていると思います。
10.	授業とは別に気軽に質問とかできる場所があるってことは、勉強 (自習) してる上で大切だと思います。
11.	教室での理解とは異なり、アドバイザーから直接指導を受けることは深い理解を得ることができません。また、教員とのコンタクトができることも大きな特典になることでしょう。
12.	先生方や院生に対して、交流をかねて質問することができる良い場所だと思います。特に先生方に対しては、学部 1, 2 年生にとつたら研究室にたずねるのは、まだ勇気がいるような感じなのでこういう場があるととても良いように思います。
13.	気軽に来れる場なのでと思います。ただ、アドバイザーとつながりがある子は来やすいけど、そうでない学生さんには敷居が高そう・・・? と思ったりしました。

表 3 SSS アドバイザーアンケートの設問と結果 2 (N=13)

設問 2 : SSS はアドバイザーにとってどのような意義があると思いますか？

1. 学生さんの様子がわかるのが面白い。
2. 講義担当外の学生も質問をしに来てくれる所。質問から他の講義の様子が推しはかれます。
3. 学生がどのようなことを考え、思いながら徳島大学での学生生活を送っているのかを知ることができる機会である。
4. 学生がどのようなところで困っているのかを具体的に知ることができる。また、説明の仕方についての再発見もある。
5. 授業改善として学生個々の理解を知る場になっています。
6. 通常とは異なる形で学生と話ができることはイミがある。
7. 相談学生が来ない時に 1 時間落ち着いてアドバイザー (私) が、いろいろな事柄に対して頭の整理ができた点。どうしても自分の居室では雑用に追われてしまうので・・・。
8. 時間がとれば、学生の考えや疑問点を解決できる有意義な場になると思います。(前期は SSS の時間があまり取れませんでした。)
9. 学生さんと個人的に接するので良いと思います。
10. いろんな学生に接することが出来るってことに意味があると思います。その上で学生の質問という形で、生の声を聞くことが出来るので。
11. 相談に来る学生が少なかったのでもっと表現できませんが、教員にとって学生の質問を受けることは、授業時の学生の理解度チェックになり、授業改善に役立つと思われます。
12. 自分自身にとっても勉強になりました。やはりアドバイスをする立場なので誤ったことを教えてはいけないと思い、改めて事前に「こんなことを聞かれたらどうしよう」と考えて対策をねっていました。
13. どんな質問がくるかわからないので、ある意味実力が試されるなあと思います。

表 4 SSS アドバイザーアンケートの設問と結果 3 (N=13)

設問 3 : SSS の改善すべき点があればお書きください。

1. 黒板があると良い。ネットワークがあまりつながらないのが残念である。
2. 学生が質問に来たい時間帯とその内容のアドバイザーの待機時間帯が合えば、さらに利用者が増えるのかもしれませんが、しかしながら、自分の待機可能な時間帯はかなり限定されてしまい申し訳ありません。
3. 特になし。
4. 運営、時間、広報等については特にないけれど、学生への説明について、練習問題が解けない場合の安易な質問窓口にならないように注意すべき。基本としては、まず自分でとことん考え抜くという姿勢が重要で、そののちに、自分の疑問点を明確にして相談に来れば助言もしやすい。
5. 現状では需要 (学生の質問) をみこして、多めに供給 (アドバイザー配置) していますが、明らかに供給過剰です。供給を減らす工夫と需要を増やす工夫を同時にできるとよいのですが。
6. 相談場所が奥まった部屋の中なので、相談に来づらい雰囲気があるのかもしれませんが。週に何回かは、open space で実施するなど、試行してみるのがよいかもしれません。
7. 金曜日の夕刻ではなく、オフィスアワーをこちらで行うなどの形で対応できればと思う。
8. 待機時間の設定が難しい (教員、学生などの予定が合うか) ため、科目で複数の教員で対応する方がよいのではないのでしょうか。
9. 特にありません。
10. 多くの学生に知ってもらってことだと思います。まだ、一部の学生しか知らないような気がします。
11. (無回答)
12. 後期からは、「今日はこんなことを話します！」といったような告知を出して、こちら側から発信するような週も作って見たらよいのでは？と思います。
13. (無回答)

が挙げられた。これらの意見については、実績を残し、環境整備ができる支援の要請を行う必要がある。2.5.7.8.のアドバイザーからは、時間割の設定について、10.12.のアドバイザーからは、広報についての改善点が挙げられた。時間割の設定に関する対策としては、アドバイザーの増加や学生の授業時間を考慮した時間設定などを検討する必要がある。また、広報活動については、より効果的な広報を実施するために、後述する SSS 利用に関する学生アンケートの分析結果も踏まえて検討が必要である。最後に、4.のアドバイザーからは、SSS が安易な相談窓口にならないように注意すべきという意見が挙げられた。これについては、SSS は質問された内容に対して、その解答を教える場所ではないことや、相談者に考えさせることも要求することなどを、アドバイザー間で確認し対応していくことが求められる。

5. 学生対象の調査による成果と課題

全学共通教育科目、学部専門基礎科目の授業を受講している学生、図書館を利用している学生を対象に、2013 年 11 月に SSS の利用に関するアンケートを実施した。授業を受講している学生の調

査では、SSS アドバイザーの教員が担当している授業と、SSS アドバイザーではない教員が担当している授業において実施した。学生対象のアンケートの回答数は 616 であり（所属や学年が不明の回答を除く）、内訳は表 5 の通りであった。設問は、①SSS を知っているか否かを問い、知っている学生には、どのようにして知ったかを問うた。続いて、②SSS を利用したことがあるか否かを問い、利用経験がある学生には、利用回数、満足度などを問うた。利用経験がない学生には、なぜ利用したことがないのかについて、その理由を選択式で問うた。なお、以降の分析は 1, 2 年生の回答のみを対象に行う。この理由として、回収したアンケートの 3 年生以上の回答は、データ数が少なく図書館利用者に偏っていること、学部が偏っているためである。また、利用者の約 75% が 1, 2 年生であることから、効果検証や今後の課題を明らかにすることにおいても、1, 2 年生のデータを使用することが妥当であると考えたためである。分析に使用するアンケートの内訳は表 6 の通りである。

表 5 SSS 利用に関する学生アンケートの回答者の内訳 (人) N=616

	学年	総合科学部	工学部	医学部	歯学部	薬学部
アドバイザーの教員が 担当する授業 (N=324)	1 年	31	89	155	36	1
	2 年	1	10	0	1	0
	3 年	0	0	0	0	0
	4 年	0	0	0	0	0
アドバイザーではない教員が 担当する授業 (N=186)	1 年	88	46	15	2	21
	2 年	2	5	0	0	4
	3 年	0	1	0	0	0
	4 年	2	0	0	0	0
図書館利用者 (N=106)	1 年	14	17	9	0	2
	2 年	13	17	0	0	1
	3 年	5	14	0	0	1
	4 年	9	3	0	0	0
	M1	0	1	0	0	0

表 6 分析に使用する学生アンケートの回答者の内訳 (人)

	総合科学部	工学部	医学部	歯学部	薬学部	合計
1 年	133	152	179	38	24	526
2 年	16	32	0	1	5	54
合計	149	184	179	39	29	580

表 7 SSS を知っている人と回答した回答数と回答率

	総合科学部		工学部		医学部	歯学部		薬学部		合計
	1 年	2 年	1 年	2 年	1 年	1 年	2 年	1 年	2 年	
回答数 (人)	85	14	77	18	98	25	1	5	1	324
合計回答数 (人)	99		95		98	26		6		
回答率 (%)	63.9	87.5	50.7	56.3	54.7	65.8	100.0	20.8	20.0	55.9
合計回答率 (%)	66.4		51.6		54.7	66.7		20.7		

表 8 SSS を知った経緯の選択率 (N=324)

ポスター	友人から	図書館の HP	図書館に訪れた時に	授業中にアドバイザーから	その他
31.2%	7.2%	4.0%	53.8%	41.9%	0.9%

5.1. 学生の認知度

まずはじめに「①SSS を知っていますか? (二択式)」という設問に対して、知っている人と回答した回答数・回答率を表 7 に表した。全体の認知度は 55.9% であり、薬学部が 20.7% と低いものの、学部による大きな差は見られなかった。薬学部の認知度が低くなった理由として、アンケートの回答者が少ないことや、アドバイザーではない教員の授業における受講者に偏っている (表 5) ことが関連していると考えられる。続いて SSS を知っている人と回答した人に対して、「どのようにして知りましたか?」という設問を複数選択可能の形式で問うた。表 8 はその選択率を表している。SSS を知る経緯として、図書館に訪れた際に知ると答えた方が最も多く、50% を超えていた。次いで授業中にアドバイザーから配布されたチラシと説明で知ったと答えた方が約 41% であった。

以上の結果から、SSS の認知度は 50% 強程度であり、SSS の存在が徳島大学生によく知られているとは言い難い状況である。アドバイザーからの改善点にも挙げられていたように、効果的な広報を検討する必要がある。さらに認知度を高めるた

めには、アドバイザーに協力を依頼し、授業中での広報や、授業とその授業外学習などとも関連して、相談対応をしていくことが必要であると考えられる。また、SSS のみの広報ではなく、学生が大学図書館を活用する仕組みを構築することも重要である。今後、大学図書館は学生の学習の場として、SSS も含めて図書館全体で設備の整備やサービスを検討することが重要である。

5.2. 学生の利用者・利用傾向

次に「②SSS を利用したことがありますか? (二択式)」という設問に対して、設問①において知っている人と回答した人のうち、利用したと回答した利用者数・利用者率を表 9 に表した。全体の利用率は、11.1% であり工学部、医学部、薬学部が 10% を超えている。ここで、薬学部については 16.7% であるが、データ数が少ないことと、表 1 で示した実際の相談者のデータを踏まえると、利用率が高いとは言えない。

以上のデータより、利用率が高い学部は工学部と医学部であると言える。実際の相談内容は前述したが、理系基礎科目が多かった。これらを踏ま

表 9 SSS を知っていると回答した人のうちの利用者数と利用率

	総合科学部		工学部		医学部	歯学部		薬学部		合計
	1年	2年	1年	2年	1年	1年	2年	1年	2年	
利用者数 (人)	5	2	13	4	10	1	0	1	0	36
合計利用者数 (人)	7		17		10	1		1		
利用率 (%)	5.9	14.3	16.9	22.2	10.2	4.0	0.0	20.0	0.0	11.1
合計利用率 (%)	7.1		17.9		10.2	3.8		16.7		

えて、医学部の利用率が高い理由として、医学部では物理、化学、生物のすべてが専門基礎科目で必要とされているが、大学入試においては2科目しか問われていない。このために、特に高校において十分に学習していない科目について、理解不足を補うための学習ができる場として活用されていることがわかる。工学部の利用率が高い理由としては、いずれの学科においても、1年次において微積分学や線形代数学といった数学の基礎が必修になっている。これらは、工学の専門科目を学習する上で、理解しておかなければいけない基礎科目である。このために、専門的な学習をするための基礎理解を促進する場として機能していると考えられる。

したがって、実際の利用者データと同様に、SSSは初年次学生の理系科目の基礎力を補うための、学習支援として意義があることがわかる。総合科学部においては、理系学科の学生の相談は見受けられるが、文系学科の学生の相談は多くなかった。この理由として、現在のSSSでは文系科目に関する相談に対応できていないことが挙げられる。アンケートにおいて、要望等を記入する自由記述欄には、「文系の科目を増やしてほしい」という記述が複数あったことから、今後は文系科目を設置する必要がある。このときに大学院生等を活用して対応していくことが考えられる。

5.3. SSS を利用した学生の意見

続いて利用者の利用回数や満足度を分析した。アンケートにおいて、利用したことがあると回答した36名に対して、利用回数を選択式で問うた。図8は利用回数の内訳を表している。この結果から、6割の相談者は複数回訪れていることがわか

る。また、満足度について4件法にて問うた(図9)。この結果から、相談者は概ね満足している様子が伺える。「SSSを利用して良かった点をお書きください。(記述式)」という設問において、挙げられた記述の中から良かった点を抽出し、カテゴリーごとに分類した。27名から回答を得て、全部で29の意見が抽出された。カテゴリー分類の結果は表10の通りである。最も多く挙げられた点は、気軽に相談できたことであり、具体的な意見は、「(SSSでは)先生と1対1で話し、研究室では少し緊張する」、「授業で不明な点を詳しく尋ねることができた」、「オフィスまで行かなくて

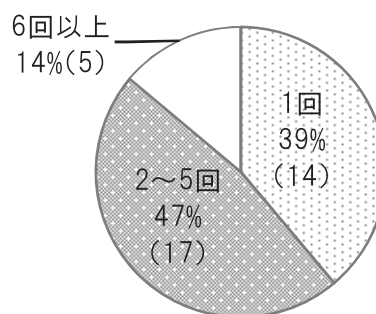


図8 SSS の利用回数の内訳 ; ()は人数

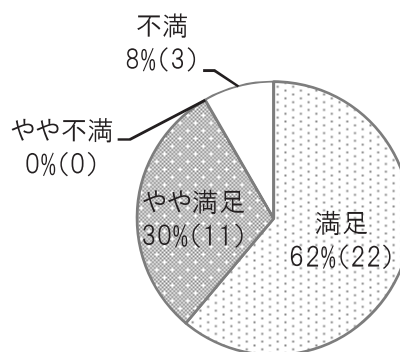


図9 SSS の利用満足度の内訳 ; ()は人数

よいので行きやすい」などである。次に、説明がわかりやすかったという意見が多く挙げられた。具体的な意見は、「親身になって話を聞いてくれた」、「具体的な良いアドバイスをもらえた」、「1対1形式で教えてもらえるのでわかりやすい」などである。続いて、アドバイザーとの1対1のやり取りを通して、様々な話が聞けたことや、関係構築ができたことが挙げられた。具体的には、「授業中はいつも厳しい先生の優しい一面が見れた」、「先生とのつながりができた」、「先輩や先生のお話が聞いて有意義な時間を過ごせた」などの意見が挙げられた。

以上の結果から、利用学生の満足度は高く、気軽に利用できる点が学生にとって有益な場所となっており、1対1で対応しているため、疑問点を深く理解することができていることがわかる。また、学習に関する疑問点の解決だけでなく、相

談をきっかけにして、アドバイザーと相談学生との関係構築や、相談内容以外にも会話が発展している様子が伺える。一方で、不満と回答した学生が3名おり、このうち1名が自由記述欄に「わからないからといって怒らないでほしい。」と記述していた。このことから、相談したものの思うような答えを得られなかったことが伺える。ただし、この学生の相談が妥当であったのか否かは不明である。また、前述したアドバイザーアンケートにおける改善点で、「安易な相談窓口にならないように注意すべき」という意見が挙げられているように、どんな質問であっても答えを教える場ではないことを、学生にも理解してもらう必要はある。

5.4. SSS を利用したことがない学生の意見

最後に SSS を利用したことがないと回答した 544 名に対し、なぜ利用したことがないのかについて、複数選択可能な形式で問うた。利用したことがない理由の内訳は表 11 の通りであった。SSS を利用しない理由で最も多かったのが「SSS を知らない」であり、全体の 43% を占め、広報不足を顕著に示す結果となった。次いで、質問したいことがないという回答が 31.3% で、これは SSS の課題ではない。次に、時間が合わないという回答した学生が 22.1% であることから、相談ニーズの把握を行うことや、授業の時間割との整合性も考慮して時間割設定を行う必要がある。

表 10 SSS を利用して良かった点

良かった点	件数
気軽に相談できたこと	8
説明がわかりやすかったこと	6
アドバイザーとの関係ができたこと	5
アドバイザーと幅広い話ができたこと	3
アドバイザーが優しいこと	3
疑問が解決できたこと	3
その他	1

表 11 SSS を利用したことがない理由の選択率 (%)

	SSS を知らない	相談したいことがない	アドバイザーに話しかけにくい	相談したい科目が時間割に入っていない	時間が合わない	実施している部屋に入りにくい	その他
総合科学部	31.0	31.7	12.7	13.4	28.9	23.9	2.1
工学部	47.3	33.5	9.0	7.2	15.6	13.8	0.0
医学部	45.6	30.2	9.5	5.3	24.3	10.1	0.0
歯学部	34.2	31.6	10.5	7.9	31.6	10.5	0.0
薬学部	78.6	21.4	3.6	0.0	0.0	0.0	0.0
全体	43.2	31.3	9.9	7.9	22.1	14.3	0.6

※利用したことがないと回答した 544 名の、各学部の内訳は次の通りである。総合科学部 142 名、工学部 167 名、医学部 169 名、歯学部 38 名、薬学部 28 名。

次に SSS を利用しない理由を学部別に比較検討した。(なお薬学部については得られたデータ数が少なく、この分析からは除外した。) その結果、工学部と医学部は「時間が合わない」や「相談したい科目が時間割に入っていない」を選択した割合が総合科学部に比べて低く、SSS が両学部のニーズに対応できていることが示唆された。つまり、理系科目が多く設定されていることが結果につながっていると推察できる。ここでも、文系の相談対応の時間を増加させる必要性が見えてくる。一方で、総合科学部は学際的な内容を取り扱う学科もあり、相談すべき内容も多様であり、正解が 1 つだけある相談とは限らない。このために、学生も相談すべき内容であるのかどうかを決めかね、相談に行くことを躊躇するといったことが起きているのではないかと想像する。その他に、総合科学部は「SSS を知らない」の選択率が最も低く、「アドバイザーに話しかけにくい」や「実施している部屋に入りにくい」の選択率が最も高い。したがって、総合科学部の学生のニーズを把握することや、SSS の設備や環境を改善することも検討すべき課題である。また、SSS が学習支援面において貢献できることを新たに見出すことも、SSS の意義をさらに増すことにつながると考える。

6. まとめ

以上の分析から明らかになった、SSS の成果と課題をまとめる。

まず SSS の成果をまとめる。SSS は初年次学生の学習や学生生活に関する疑問点や不安を、解消するために寄与していることがわかった。特に、学習に関する相談では、理系基礎科目においては、学習内容の理解を促進するために貢献している。また、レポートの書き方のように、スタディスキルに関する支援においても貢献していることがわかった。SSS の利用学生はアドバイザーとの 1 対 1 のやり取りを通して、アドバイザーとの関係を構築したり、進路や学生生活に関するさまざまな話をしたりしていた。このことは、アドバイザーにとっても学生の様子を知る機会となっていた。利用学生の満足度も高く、気軽に利用できる

ところも、学生が相談する上で必要な要素であることがわかった。

次に SSS の課題をまとめる。SSS の徳島大学における認知度は、学生の半数程度にとどまっており、まずは SSS の存在を知ってもらうための広報戦略を検討する必要がある。このときに、SSS 単独で広報を行うのではなく、図書館やアドバイザーとも協力をして、学生に有益な情報をもたらす企画の実施や、図書館の利用を促進すること、学生の授業外学習を支援すること、などを含めて考えることが大切である。続いて、SSS の時間割について、学生のニーズや授業との関連を考慮して設定することや、文系科目を増加させる必要が明らかになった。現状では、教員アドバイザーの割合が多く、学生の動向に合わせた設定が十分にできていない。そこで、大学院生のアドバイザーを確保、増加していくことで、対応できると考える。他大学で実施している同様の学習支援では、大学院生のみで実施するケースや、指導を行う大学院生に謝金を支払うケースが存在する。徳島大学においても、検討していきたい課題である。最後に、SSS が安易な相談窓口にならないようにしなければならない。アドバイザーに協力を依頼する際には、「学生の質問に何でも答えるのではなく、学生に考えさせ、ヒントを与える程度にとどめてほしい」と伝えている。しかし、今後は大学院生のアドバイザーを増加させていくことを考えても、アドバイザー間の申し合わせなどを行う必要がある。

以上のように、SSS の成果が明らかになったものの課題も多く残されている。SSS の取り組みにおける意義は、これで十分であるとは言えないが、一部を明らかにすることができた。現在の大学において、学生の主体的な学習を促進することが求められており、そのための学習環境の整備、学習支援の充実は喫緊の課題である。この流れの中で、大学図書館は、従来のインフォメーション・commons からラーニング・commons としての役割を担う施設として存在意義を高めるようになった⁴⁾。SSS の取り組みを発展させ、実践を積み重ねていくと同時に、成果や課題を明確にするための研究を進めていくことで、徳島大学における学習支援

の充実だけでなく、我が国の大学教育における学習支援の実践，研究の充実につながると考える。

参考文献・資料

- 1) 中央教育審議会：新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて，2012.
- 2) 長澤多代：大学教育における教員と図書館の連携を促すカスタマイズ型の学習支援，日本図書館情報学会誌，58，4，185-201，2012.
- 3) 文部科学省：大学図書館の整備について（審議のまとめ），2010.
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1301655.htm (2013.12.31.)
- 4) 米澤 誠：ラーニングコモンズの本質，名古屋大学附属図書館研究年報，7，35-45，2008.
- 5) ふじたまさえ：学生と図書館の協働事例まとめ，ラーコモラボ通信，16，2012.
<http://archive.mag2.com/0001260410/20121126142822000.html> (2013.12.31.)
- 6) 山内一祥：愛媛大学における大学院生による学習支援の現状と課題，大学教育実践ジャーナル，6，47-55，2008.
- 7) 西本佳代：学生支援活動の全国的特徴，高等教育研究叢書，112，33-42，2011.